

ダビデが部下の妻を寝取り、その部下を戦死させた、というダビデの罪から始まった物語をわたしたちは聞いてきました。それはダビデを優れた王として、立派な人格者としてみたいと思っている人には目を覆いたくなるような、耳を塞ぎたくなるような話でした。しかし、ダビデの罪の話はそれだけではありませんでした。さらに深く、やっかいなものになっていきました。

ダビデには古代の王の常として、何人かの妻がいました。したがって、そこに異母兄弟というものが生まれてくるのです。今日の聖書個所に登場するのはダビデのおそらくは長男であったアムノン、その異母兄弟であるアブサロム、そしてアブサロムとは同じ母の子であったタマルです。3人はすべてダビデの子どもでした。長男アムノンは異母兄弟のタマルを好きになり、いとこの悪知恵もあり、タマルを騙したうえ、まったく強引に、力づくで肉体関係を持つのです。ところがタマルと関係をもったアムノンは今度は手のひらを返したように、彼女を憎むようになり、タマルを追い出してしまう。ある意味アムノンのタマルへの思いが自己中心的な我儘なものだったということです。

タマルの受けた傷は、測り難いものでした。その事実を知ったタマルの兄アブサロムは怒りを抑えて、「妹よ、今は何も言うな」といい、絶望の淵にある妹を自分の家で面倒をみます。しかしアブサロムは兄アムノンを赦したわけでも、あきらめようとしたわけでもなかった。アブサロムはアムノンに対して憎悪を抱き続けたのです。父ダビデは一部始終を聞き、激しく怒った、というのですが、アムノンに対して、何らのさばきも叱責もせず、なんの行動も起こさなかった。

二年後、時がやってきます。アブサロムの所有する羊の毛を刈るものが集まる機会があり、アブサロムはそこにダビデの息子つまり王子たち全員を招待します。もちろん父ダビデ王も招待します。しかしダビデはそこには出向かないと応じると、ならば兄アムノンをぜひにといい、結果的にアムノン以下王子たち全員が出席することになりました。アブサロムはここで酒に酔ったアムノンを計画的に殺害するのです。二年に及ぶ憎悪の念を、妹を苦しめた者を殺害するのです。

この知らせがダビデのもとに届くと、彼は立ち上がり、衣を裂き、地に伏し

た。そしてほかの王子たちが帰ってくると、共に激しく泣いたのです。泣くのですが、こんども、殺害したアブサロムに対して何の言葉も、行動も起こさない。アブサロムは自らの意志で逃げ、ゲシュルの王のもとに身を寄せ、三年間そこにとどまるのです。

すさまじい物語です。ダビデの息子たちの犯した罪の物語。しかし、なぜダビデの息子たちの罪がこれほど詳しく、細部の描写も含め描かれているのでしょうか。それは、この13章が12章とのつながりの中に置かれていることからわかるように、ダビデの罪の罰だ、と読む人は少なくありません。ダビデはかつて他人の妻を強引に自分のものとし、その夫まで殺した。そのことは多くの人の知るところだったでしょう。まして王宮の中では知れ渡っており、子どもたちも、父のそのような行為行動を何らか知らされてきたでしょう。今ダビデの息子の一人が、力づくで異母兄弟を自分のものとした。しかもそこで傷つき苦しみを受けているのはダビデの娘なのです。ダビデは息子アムノンに対して、父として何の叱責の言葉も、咎めの言葉も投げかけていない。投げかけられないのです。父である以前に一人の人間として、自分自身が情欲に負け、力で相手を奪った、その自分と何ら変わるところのない行為を息子がしでかした。その事実を前にして、言葉がなかった。ダビデはあらためて自分の罪を思わないわけにはいかなかった。自分が犯した罪と根本同じだ、と思わざるを得なかった。罪の連鎖が起こっている。息子の罪は、ダビデが犯した罪への罰だ、そうこの物語を読む人がいることは先ほど申し上げた通りです。

その罰というのは前回わたしたちが見たような、罪の罰として、自分の子どもが死ぬ、ということとは違うものです。自分のした悪が息子によって繰り返される、そのことによっていやがうえにも自分の犯した罪があらわになるような、こじ開けられるようにして押し掛かってくる、そういう罰です。息子を見ることで、自分の罪を思わないわけにはいかない、そういう仕方の罰だ、というのです。

けれど、聖書を読むと、息子たちのしたことがダビデへの罰であるとはどこにも書いていません。ダビデへの罰なのだと読む気持ちはわかるのですが、それが神からの罰だとはどこにも書いていない。そもそも13章には直接的な形では神は出てきてはおられない。とすれば、ここで描かれているのは、人間の罪の連鎖、積み重なっていく歩みそのものです。人間の悲劇的な歴史。救いようのない、自分たちではどうしようもない、罪の歴史。しかし、そうであるな

らば、ダビデはなぜ、自分が罪を犯し、相手に言い知れぬ悲しみを与えたときのように神に悔い、断食し、今ここで息子の罪のために、神を求めないのか。タマルのために祈り、アムノンのために祈り、アブサロムを思って祈らないのか。

竹森満佐一という説教者がいましたが、竹森さんはここでダビデは「彼はアムノンのしたことも、アブサロムがしたことも、彼が、バト・シェバに対してしたこと、ウリヤに対しておかしたことと同じように、神の前に悔いて、ゆるしていただける、とは思いませんでした。自分の子どものことだからかえって、判断が狂って、正義を貫くことも、真の愛を行うこともできなかつたのであります。」と語っています。

例えばダビデはアムノンのしたことを憎んだでしょう、しかしもう一方で息子としてこよなく愛しており、結果として正義を貫くことができなかつた、というのです。自分の子どものことだから判断が狂った、というのです。別にダビデに限らない、親だからこそ、子どもをかわいがり、親だからこそ、子どものしでかしたことの前でおろおろしてしまう。それはいたし方ない。だがそこにも人間の罪は深く、絡みつくようにして働いている。アムノンがタマルにしたことは人として、してはならないことです。確かに古代社会では異母兄弟の結婚ということはあり得たことです。しかしアムノンの問題は、異母兄弟のこと以前にタマルを騙して、その上で力づくで奪うという人としての最低のことだったので。親として断固として判断をしなければならぬ。ましてイスラエルにおいて、親は神のみこころの担い手として子に向かい合うものでした。息子がすでに大人になっているのだから、自分の判断、自分の反省や悔い改めに任せる、というようなことは、この場合、単なる責任逃れであります。

最も大事なことは、ダビデ自身がこの息子の罪において、神の前に立つということ。前回の時にも申し上げた、神を求める、ということです。

ダビデは息子の罪という問題にぶつかって、自分の犯した罪が重なってきたということを言いました。それはもう少し別の形で言えば、自分の人間としての弱さと重なり合う弱さを息子の中にも見た、ということです。

不思議なことですが、親子というのは、善いこと、良い部分で似るということもあるでしょうが、人間としての弱さ、脆さ、人間としてのあやうさ、ダメな部分、が似るということも少なくない。アブサロムの容姿はとても美しいものだったということが聖書に記されていますが、それはまさに父親譲りのものだったのでしょう。父から良いものもたくさん受けていたでしょう。しかし、人としての弱さに、罪人であるということにおいて、どうしようもない親子の

重なり合いをダビデは感じていたはずでず。

だからこそ、人は罪であるとか、弱さとかいうその自分でどうしようもできない、みっとも悪く、醜悪な、罪のただ中で、神を求めて、神の導きと支えを受けるものでなければならないのです。ダビデはここで、完全に行き詰っている。子どもの問題で、そしてそれはまさに自分自身の問題として、自分ではどうしようもできない事柄として行き詰っているのです。しかしダビデはこの13章において、神と向き合おうとしていない。自分自身が罪を犯したとき、あれほど神の前でひれ伏し、祈り、断食し、神を求めたダビデが、ここにはいない。神を求める、神に信頼する、すなわち、どのような状況の中でも、神のみ心の中で歩ませてください、神の恵みの働きの中で生かしてください、と祈り求める。息子たちに対して、ああしてほしい、こうしてほしい、こうであってほしい、という自分の祈願ではなく、息子も娘もあなたのみこころ、あなたの真実の中で歩むことができますように、と祈るほかなかったのに、13章のダビデは祈っていない。わたしは先週12章のダビデの信仰を旧約聖書の中でも屈指の信仰者の生き方と、紹介しました。しかし13章にそのダビデの姿はない。それがダビデの、さらに言えば人間の姿なのでしょう。罪人の姿。昨日の信仰は昨日の信仰であって、今日は今日の信仰を神によって与えられる以外ない、ということなのです。ダビデのような人であって、新しい現実の中で、親子の全く経験のない出来事の前で、判断が狂い、正義を貫くことができず、信仰によって生きることが揺らぐのです。だからこそ、この行きづまる状態の中で、神を仰ぐものとされていかなければ、生きられないわたしを知らなければなりません。ダビデはこの後、さらに過酷な家族の問題に直面していく。神を求めるということがわたしたちにとってどれほど死活問題なのか、わたしたちはここで本当知らなくてははいけない。ダビデと共に知らなくてはならない。神は必ず、わたしたちをその恵みの中で、みこころの中で生かしてくださるのでですから、そのことを信じて、神に信頼して歩んでいきましょう。